

醫學博士平井毓太郎君の本邦乳兒に於て屢々見らるゝ腦膜

炎様病症の原因に就ての研究に對する授賞審査要旨

本邦に於て、人乳營養兒に屢結核性腦膜炎に酷似せる症狀を呈し、而かも治癒に赴く疾病ありて、此が日本に特有のものなることは、ベルツ先づ之を指摘したり。其後弘田長は之れを一種特別の疾病として記載し、「所謂腦膜炎」と命名し、伊東祐彦も亦本病の特色を指摘して以來、本病は本邦醫學者の注意する所となり、其病理に關して討論盛なりしも、討論久きに互つて結着せざりき。明治三十九年に至り高洲謙一郎は、本病患兒の血液に鹽基顆粒を有する赤血球の多數出現することを發見し、本病の性質に一道の光明を投せしが、其後平井毓太郎君は、此事實并に血液中にピリルビンの増加あること、又時として尿中にヘマトポルフキリンの出現あること等に鑑み、始めて本病の起因が鉛毒と關係あることを考へ、其方面に向つて觀察及實驗の歩武を進め、終に大正十三年假稱「所謂腦膜炎」は慢性鉛中毒症なりと唱道せり。而して其鉛源は、夏時小兒の汗疹に對して用ひらるゝ含鉛白粉又は含鉛散布料の外、母體化粧用の含鉛白粉を乳兒が直に經口的に攝取し、或は母體より乳汁内に排泄せらるゝ鉛分を飲下し、稀には含鉛色を用ひたる玩具を舐むる等に因るものとせり。乳兒が久しきに涉りて鉛分を氣道消化管或は皮膚より攝受する時は、遂に先づ消化不良の症狀を呈し、食氣不振、便色暗

綠色を呈し、嘔吐を起し、神思不安、睡眠不良、神經過敏となり、痙攣頻發し、精神朦朧となり、更に諸症増悪して、終に衰弱により斃るゝもの患兒の半數を占む。又視覺障礙、運動麻痺痲呆等を遺すこと往々なるを見る。本症に於ては、全經過中發熱殆どなく、血液中には既述の如く赤血球に鹽基性顆粒を見、血清のビリルビン量増加す。又腦脊髄液は其壓著しく増進し、色黄染を呈し蛋白の量多く、グロブリン反應陽性、而かも含糖量は略通常にして細胞稍多し。

平井君の學說の根據は、單に此等臨床的考察に止まらず、尙ほ患兒の死後、其諸臟器に就て鉛の比較的多量に含蓄せらるゝことを證明し、患兒の毛髮、糞便、尿中にも亦鉛分を發見し、更に立證困難なりとせらるゝ腦脊髄液に就ても、亦確實に鉛分を検出することに成功せり（化學分析ポラログラフに依る實驗及分光分析は中瀬、志方、木村三君擔當）。其他、病理解剖的變化として、弘田長は腦膜血管の充盈、軽度の浮腫及び溷濁を報告せしが、平井君の門下大久保君は、始めて大腦皮質表層に於ける脂肪顆粒細胞の存在と軟腦膜の細胞増加を報告せり。尙實驗的鉛中毒症に就ても、平井君門下諸君の動物實驗あり。

大人に於て鉛中毒の爲に腦膜炎様症を惹起することは、佛國二三の學者が指摘して之を鉛中毒性腦膜炎と命名し、又鉛中毒患者の腦脊髄液中に鉛分あることは、佛國及米國の學者の證明せし所なるも、本邦の乳兒に於ける腦膜炎様疾患が鉛中毒なることを闡明せるは、平井君の功績なりとす。斯くて本

邦に於て多年原因不明にして多數乳兒の生命を脅したる本病は、平井君の研究努力によりて、其病原の主要々件を明瞭にし、治療并に豫防の途、此に依りて始めて開け、之が實施は各地に於て顯著なる成績を擧げ、乳兒の本病に對する罹患率の減少を來せり。